移動経験の二極化と社会意識：人々の移動をふまえた都市研究に向けて

2023年9月7日　日本都市社会学会第41回大会
シンポジウム「大都市への移動を問い直す」

東洋大学社会学部　西野淑美

本報告の構成　解題と視点提供

１．都市社会学にとって移動を取り上げる意味　試論

２．大都市への移動 基本データと背景

３．大都市への移動 その階層性
（１）移動経験の二極化
（２）意味づけの複数性

４．人々の移動をふまえた都市研究に向けて
（中澤報告・申報告との関連）

1．都市社会学にとって移動を取り上げる意味 試論

- 都市社会学・地域社会学の視点：「都市」「地域」は人々の意味づけ（解釈、ものの見方、社会意識）にどう作用しているのか？

①事実（観察可能なこと）の詳細な理解がまず必要

「都市」「地域」における生活や行動
「空間」「距離」「場所」の影響
} 背景にある構造

⇩

②そのうえで、人々が生み出す意味づけの説明が可能に

意味づけを経て人々は判断し、語り、工夫していく

「都市」「地域」が人々の意味づけを規定し、人々が「都市」「地域」を意味づけていく、その双方向的な作用を明らかにする

都市社会学にとって移動を取り上げる意味

- ①事実（観察可能なこと）の詳細な理解

生活の背景には、人々が経験してきたことの違い

・フィールドを構成する人々の経験の複数性
　→地域内の差異、地域間の差異

・経験を踏まえて、個人は自分の状況を判断し、次の選択・行動へ

ローカル・ライフコース　（中澤・神谷 2005）

「個人のライフコースは、地域が付与する固有の可能性と制約の中で、過去に規定されつつ、形成されてゆくのである」

都市社会学にとって移動を取り上げる意味

- ②人々が生み出す意味づけの説明

・事実としての「移動」の変化と「移動」の見え方の区別（中村 1999）

・意味づけを通して、制約を強めるような規範も、制約を乗り越えるような工夫も生まれうる （それがさらに①の事実を変えていく）

・「地域」「都市」「空間」「距離」「場所」といったカテゴリー（概念）が動員されるような、解釈の場面

→この解明も都市社会学・地域社会学の範疇

例：“コミュニティ”、“ふるさと”、“一極集中”、“地元志向”など

都市社会学にとって移動を取り上げる意味

- 都市や地域の研究にとって、改めて地域移動を取り上げる意味

・複雑性：人々が地域を移動→それだけで①で考えるべき変数が増加
cf.モビリティーズ・スタディーズが注目する複雑性

・社会意識：「多くの人が移動の経験を持つ、移動が当たり前」の時代
一方、生まれる場所は選べない
→この状況で、移動すること／しないことは、どんな格差の感覚、剥奪感、自己評価を生む？ cf. 経験の複数性　昨日のテーマ部会

・構造：モバイルな社会と言われる一方、人はそう簡単に都道府県を超えるような転居（地域移動）をできない　⇔ 経済合理的に自由に移動
→例えば一極集中の背景にある大都市に若者を送り込む社会構造、災害後も生活基盤を動かしづらい社会構造等もっと認識されてよい
cf. 新都市社会学　社会の構造を作る力への注目

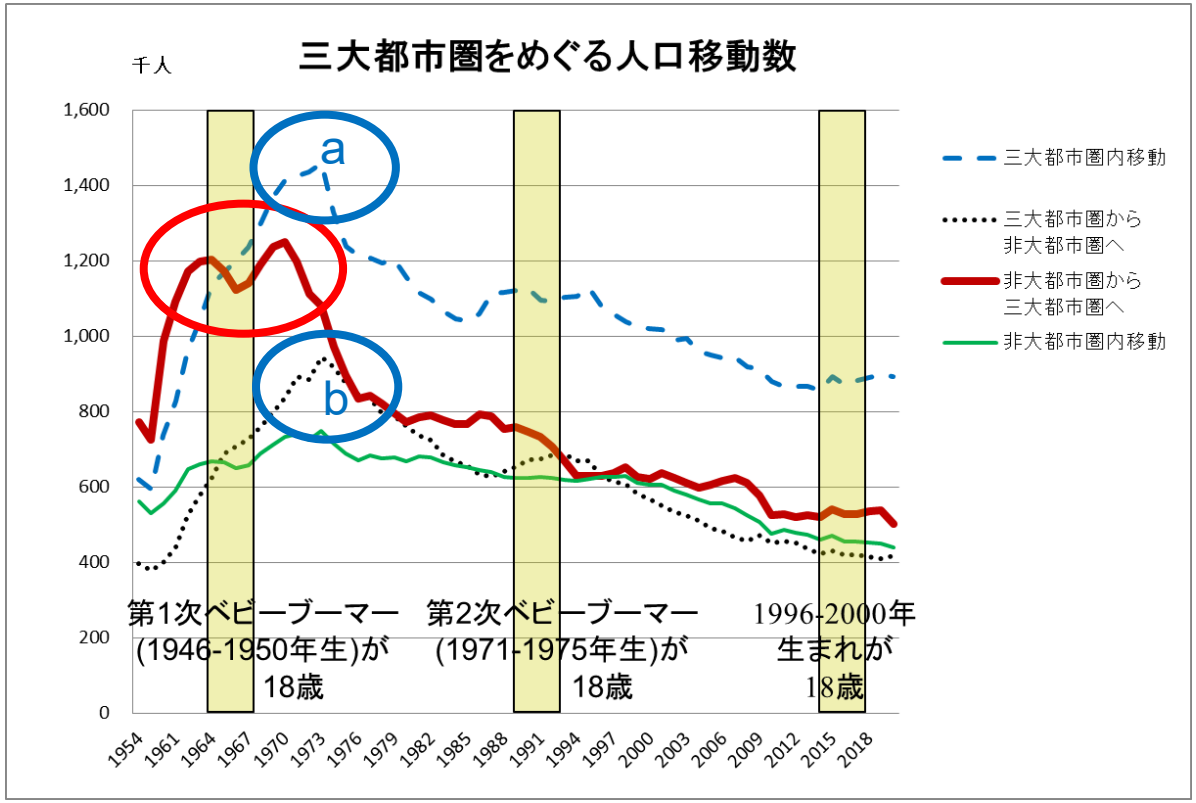
都市社会学にとって移動を取り上げる意味

- 既存の研究の水脈　※文献はあくまで一例

・戦前～高度成長期の大都市への人口大移動（松本・丸木編 1994）、
・大都市への人口流入を受けてのコミュニティ形成（磯村他編 1971）、
家郷やマイホームへの社会意識（高橋 1974; 見田 1965）
・出稼ぎの研究（渡辺・羽田編 1987）→ホームレス研究へのつながり
・同郷集団のネットワーク（鰺坂 2005）→地理学への影響
・地理学　出身を同じくする人々の地域移動・居住地選択（江崎他 1999, 2000; 荒井他編 2002）→社会学系でも（東大社研他編 2009; 石黒他 2012）
・教育社会学　進学に伴う移動・非移動（吉川 2001→ローカルトラック概念の提示; 遠藤 2022）
・階層研究　社会移動と地域移動（粒來・林 2000; 佐藤 2004）
・国際移動の研究　流入と定着（奥田・田嶋編 1991）→今日の申報告
・モビリティーズ・スタディーズ（Urry 2007）
・災害などによる非自発的な移動　大震災後（特に福島）、都市計画系も

2. 大都市への移動 基本データ

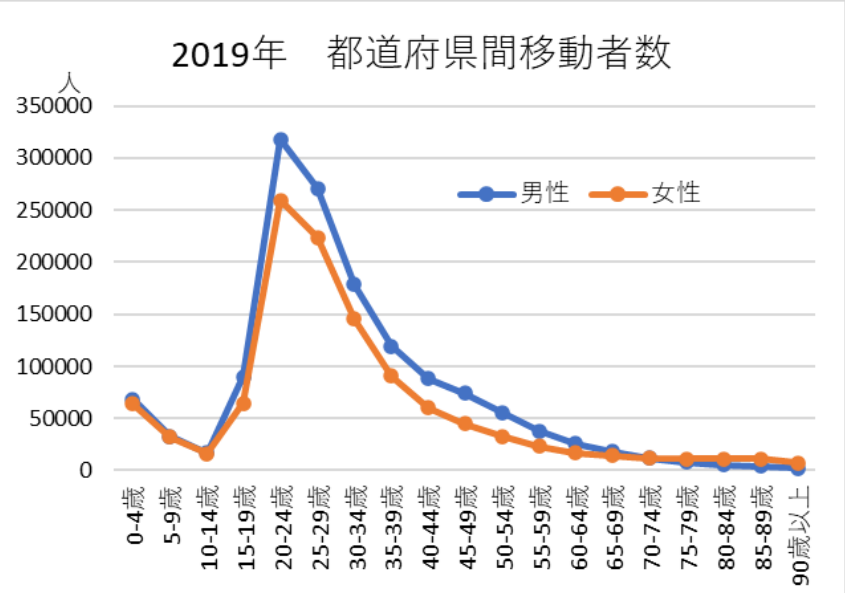
大都市圏への人口移動（＝転居）が最も多かったのは1960年代
少し遅れて、a.大都市圏内の移動、b.大都市圏からの移動
その後実数では減少傾向



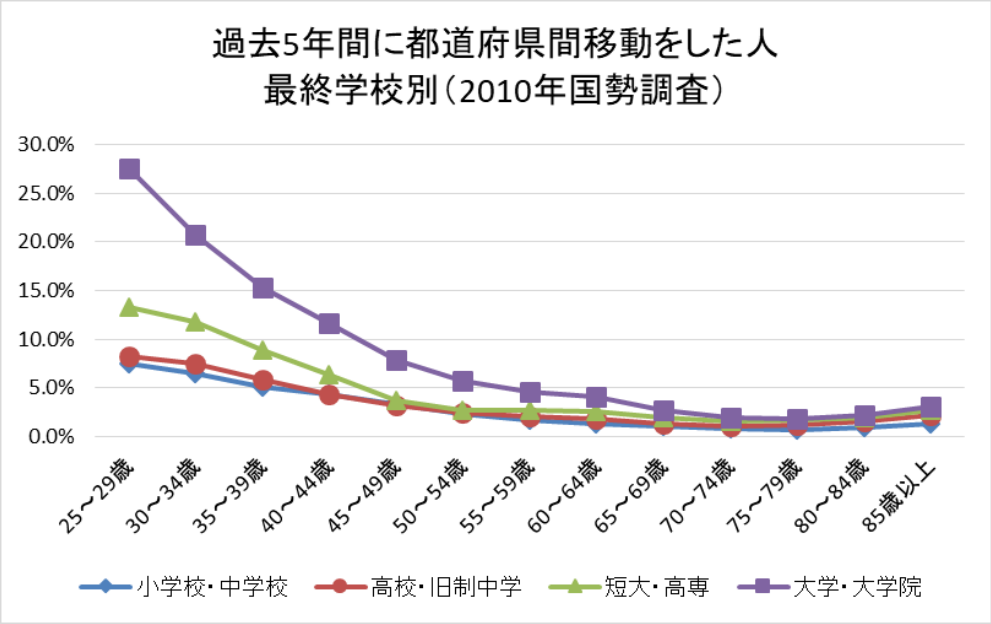
データ：総務省統計局『住民基本台帳人口移動報告年報』 図出典：国立社会保障・人口問題研究所「人口統計資料集」2021年版表9-2より西野作成

大都市への移動 基本データ:男女差と学歴差

・都道府県を越える移動は男性の方が多く発生し、また学歴が高いほど発生する割合が高い。



出所：総務省統計局,2020,「住民基本台帳人口移動報告 2019年結果　結果の概要」表2より西野作成



2010年国勢調査より西野作成

大都市への移動 基本データ:出生地と移動経験

県外に移動した経験を持つ人は非大都市圏生まれに多い。
大都市圏生まれは動かない。
出生地が東京圏(1都3県)で現住地も東京圏の人＝91.2%
⇔ 四国72.1%、東北74 .6%

県外移動歴が無い人の割合が低い都道府県トップ10

島根県、鹿児島県、長崎県、秋田県、佐賀県、高知県、山口県、大分県、宮崎県、青森県

県外移動歴が無い人の割合が高い都道府県トップ10

愛知県、北海道、埼玉県、神奈川県、千葉県、兵庫県、滋賀県、静岡県、岐阜県、宮城県

データ:国立社会保障・人口問題研究所 「第8回人口移動調査」(2016年実施)

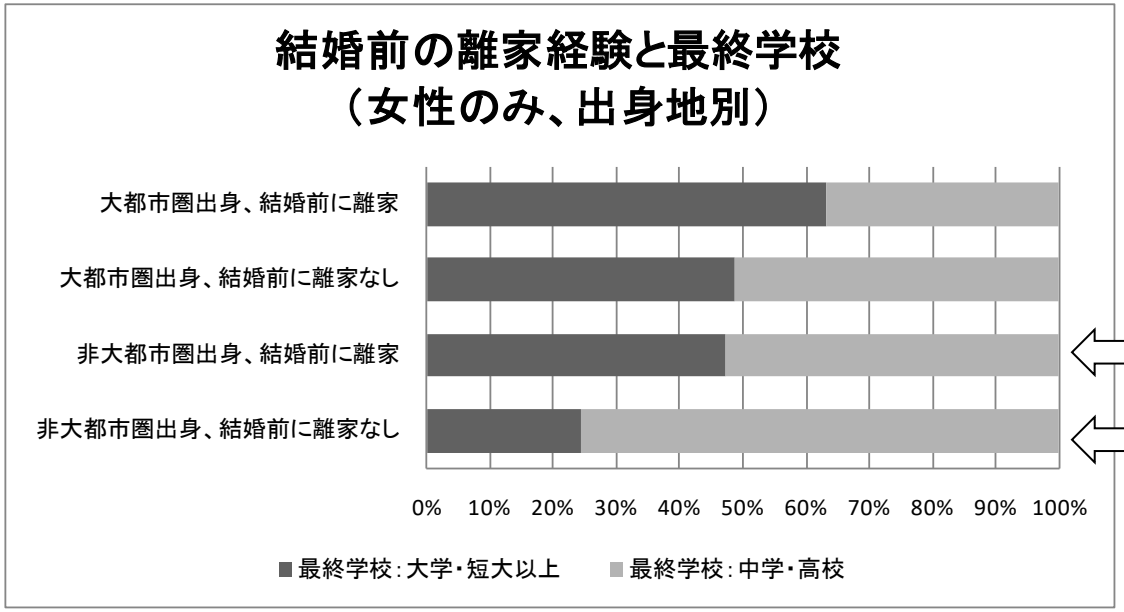
大都市への移動 背景：機会の地域間格差

- 地域間の格差：移動の必要性の高い地域と低い地域の存在

・自宅から通える大学の多寡　学科・偏差値の選択肢

・就職機会の違い　量だけでなく内容

非大都市圏生まれ：地域移動は高学歴への機会 移動した人だけが大都市圏出身者並みの学歴獲得 ⇔ 大都市圏生まれ：移動の必要薄い



データ：財団法人家計経済研究所「女性と資産」調査

西野淑美「女性の地域移動歴と教育・住宅所有の機会」『社会福祉』47号、2007

大都市への移動 背景：機会の地域内格差

非大都市圏生まれの場合、父職が専門管理の進学移動率が高く、事務販売・ブルーカラー・農業の場合は低い傾向があると指摘されてきた

→移動に伴う費用を負担する親の経済力の差、アスピレーションの差

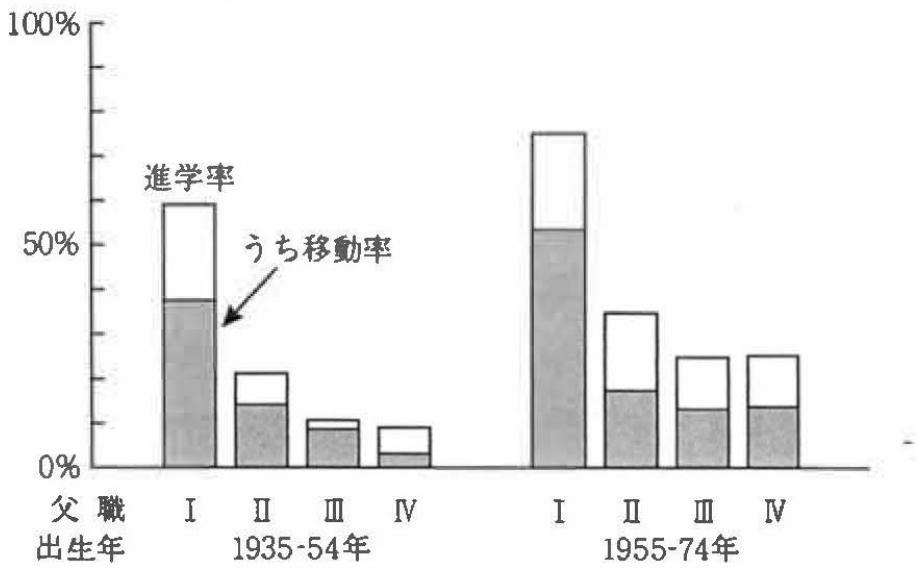


図4-4　父職別、高等教育進学率とそれに占める就学移動率（地方出身者のみ）

（注）父職Ⅰ：専門・管理，Ⅱ：事務・販売，Ⅲ：ブルーカラー，Ⅳ：農業

（出所）SSM調査。

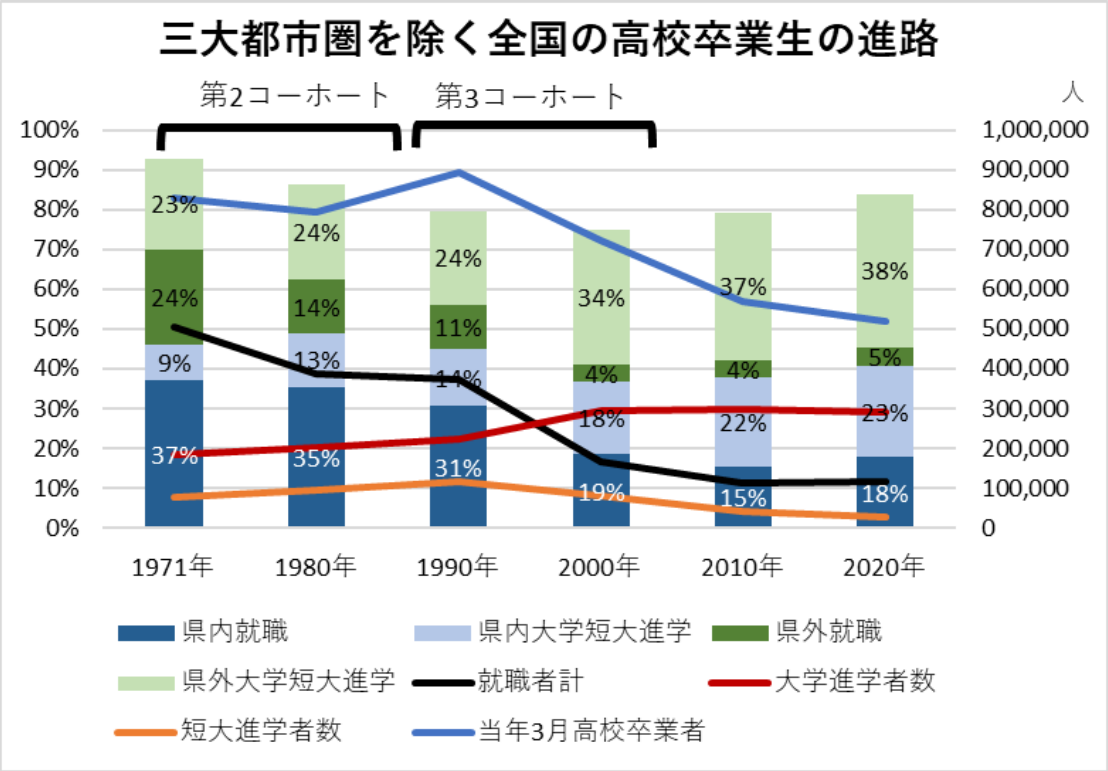
図出典：林拓也(2002)「地域間移動と地位達成」原純輔編著『流動化と社会格差』ミネルヴァ書房
データの出生年は本報告後半福井調査の第1コーホートと第2コーホートにほぼ相当

3. 大都市への移動 その階層性:
(1)移動経験の二極化

- 県外に行く層(図の緑系)と地元に残る層(青系)

県外移動:70年代まで就職と進学が半々 → 2000年代はほぼ進学移動のみ

⇒大都市への移動が学歴により選別される社会へと変化　cf. 吉川徹 “学歴分断社会”



大学進学者の実数自体は2000年代通して変わらず
→生徒数減少に伴い、進学者の割合が県外・県内とも増加

※就職者に占める県外就職者の割合には地域差
愛知4.1%～青森45.6% (2019)

データ:学校基本調査より図西野作成　進学は前年度の浪人生を含む

大都市への移動 その階層性：（1）移動経験の二極化

- 福井市出身者への調査を事例に考える　石倉他（2012）,西野（2019）

（1）質問紙調査　　※中卒者がカバーされていないことに注意

市内公立高校7校中6校の同窓会経由で卒業生に住居の履歴を調査
2010年12月-2011年1月実施（1校は2013年2月）
学年を絞り卒業生約1/10に調査　調査時23-74歳男女　進学者回収率高め
有効回収数 2064票（対発送数回収率 30.3%、対抽出数回収率23.1%）

（2）インタビュー調査

・普通科高校2校と専門高校1校の多世代の卒業生37名（2015年実施）
・福井県出身で関東圏に住む20-30代女性31名（2014年 県庁と共同実施）

※共同研究者　石倉義博、元森絵里子、平井太郎、西村幸満
　協力：福井県庁、東京大学社会科学研究所希望学プロジェクト

大都市への移動 その階層性:（1）移動経験の二極化

- 福井市の地域特性

・県庁所在地、中核市

・関西方面、また名古屋方面、金沢方面へも比較的アクセスがよい。

・人口　戦直後の10万人程度→1980年 25万人 →その後27万人前後

・製造業を中心に堅調な産業、市内に本社機能を持つ上場企業10社以上

・公立普通高校4校、同専門高校3校、私立高校4校（普通科・専門科併設校3校、普通科のみの女子高1校）

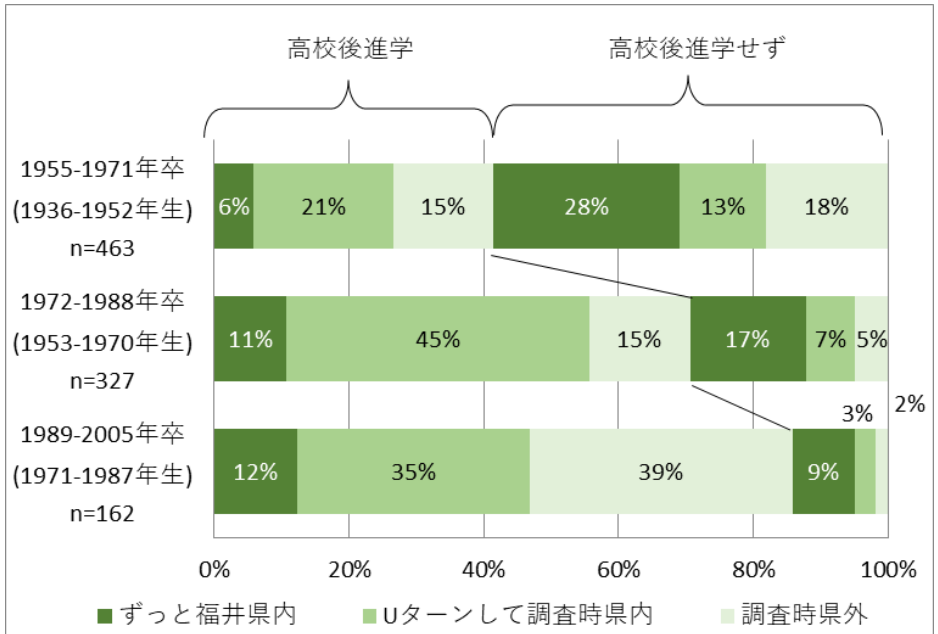
・国立大学1校、私立大学3校、私立短大1校、隣接自治体に公立大学1校

・高校卒業後の進路はスライド13と概ね似た傾向

・3大都市圏への転出超過は、1950・60年代が大きく、1970年代前半の人口移動転換（石川 2001）の時期に一気に縮小。バブル崩壊後若干転入超過、2000年代にかけて再度70年代後半～80年代前半並みの転出超過。

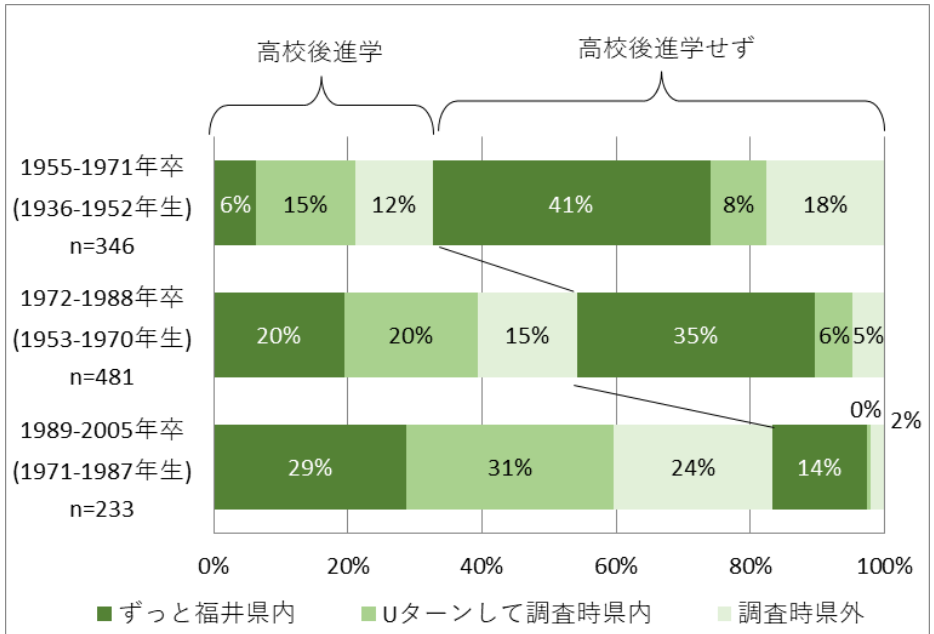
大都市への移動 その階層性:（1）移動経験の二極化

・福井市での調査　進学率上昇→18歳での移動を過半数が経験へ
　ただし卒業後は、Uターン層と県外定着層に二極化
・非進学層は地元への滞留がほぼ既定路線に　　二重の二極化



福井市内高校卒業生の地域移動パターン（男性）

出所：福井調査質問紙調査より作成



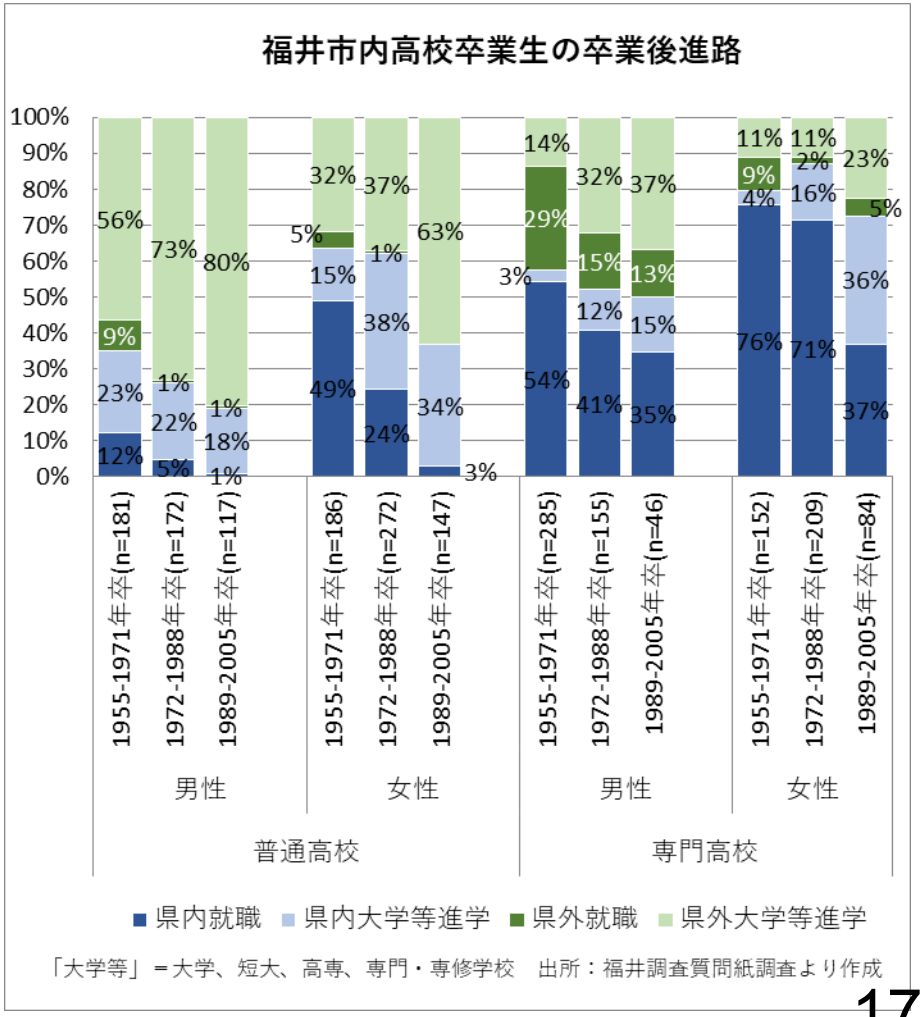
福井市内高校卒業生の地域移動パターン（女性）

出所：福井調査質問紙調査より作成

大都市への移動 その階層性：（1）移動経験の二極化

- ジェンダーによる差：福井市調査
  女性が県内に留まる率高い
  ただし近年の普通高校は男女差小
  ※釜石市調査：全体的に男女差小
  自宅から通学可能な大学の
  有無も影響

- 高校種別による差：福井市調査
  普通高校：18歳での県外移動は
  当たり前 ⇔ 専門高校：半数以下
  ※釜石市でも大きな差
  移動と進学のリンク←高校入学時に
  既に移動可能性が二極化



大都市への移動 その階層性：（2）意味づけの複数性

- 第1コーホート　1955-1971年卒(1936-1952年生)

“県外に出る人は出る、出ない人は出ない、そして出たら帰らない”
移動するエリートが存在、一方学歴を経ない社会移動の可能性も

・Aさん　進学校から東京へ　全体では少数でも、準拠集団には東京進学者
「それほど深く考えずに東京に出ました」（男性：県外進学→ずっと県外）
→一度都会に出るのは当然、戻らないのも当然と感じる層の存在

・Bさん　専門高校卒業後大手銀行へ　抜擢され、のちには支店長に
→高卒で、大都市への移動を通して社会移動する可能性が、まだあり得た時代（男性：県外就職→ずっと県外）

大都市への移動 その階層性：（2）意味づけの複数性

- 第1コーホート　1955-1971年卒(1936-1952年生)　続き

大きなジェンダー差の存在

・Cさん　進学校から東京へ進学→福井で花嫁修業→結婚で東京へ

「あのころはお見合い結婚がすごく多かったですから、お嫁道具の1つとして短大でも行っておいたらどうでしょうみたいな、そんな感じでの受験でした。将来何になりたいからその学校へ行きたいとか、そういうものはなかったんです。」（女性：県外進学→Uターン→結婚で県外）

・Dさん　専門高校卒業後、東京で服飾の技術職→福井へUターン

「『都会にいた女』ということで、結婚のときに反対されました。都会から来た女じゃないですよ。都会に何年か行っただけだけれども。ちょっと考えられないでしょう、今だったら。」（女性：県外就職→Uターン）

大都市への移動 その階層性：（2）意味づけの複数性

- 第2コーホート　1972-1988年卒(1953-1970年生)

“県外進学はよくあること、その分Uターンもよくある経験に”
※男性は出て戻る、女性は県内進学

・Eさん　オイルショック後に大学を卒業、厳しい就職状況に直面

「『大学は出たけれど』ということだったですね。すさまじい。就職がないので、一応地元に帰ってきました」（男性：県外大学→Uターン就職）

・Fさん　一度は福井を出るべきか考えたと語る進学校の女性たち

「（県外進学を希望していたが）会社の中でも、大学もずっと福井だったので、「おまえは知らないんだよ」みたいに言われることが結構多くて、やっぱり一回県外に出なくちゃだめじゃん、というような感じはありました。」
（女性：県内進学→県内就職）

大都市への移動 その階層性：（2）意味づけの複数性

- 第2コーホート　1972-1988年卒(1953-1970年生)　　続き

学歴なしでは大都市での社会移動の道が閉ざされていく感覚

・Gさん　当時すでに珍しかった県外への挑戦　自分は成功したが…

「昔だったら、あかんかったらトラックの運転手でもやれば飯は食える、というような気持ちで、それを代替の逃げ道に置きながら、何かに進んでいくというのはありましたけど、今はなかなかね」（男性：高卒就職→県外で起業）

大都市への移動 その階層性：（2）意味づけの複数性

- 第3コーホート　1989-2005年卒(1971-1987年生)

男女とも“大学で一度は出るのが「当たり前」に映る”　この状況が生み出す二重の二極化（出る／出ない、出た後に戻る／戻らない）

・移動しないことへの不安　→県外に出ずにはいられない進学校生

Hさん「可能性を狭めるだけのような感じがして（福井大学には）行けなかったのです。（中略）これしかできなくなるということを怖れていたかもしれないですね、先生にしかなれなくなるとか、地元で決まった企業にしか入れなくなるとか。」（女性：県外大学→県外就職（その後起業））

18歳で若者を選別し、その多くを県外に送り出す堅固な構造の存在

cf. コロナ禍でも15-19歳の東京圏への転入超過数は2019年比でほぼ下がらず（住民基本台帳人口移動報告）

大都市への移動 その階層性：（2）意味づけの複数性

- 第3コーホート　1989-2005年卒(1971-1987年生)　続き

→下降移動しないための大学進学移動　二つの異なる実感

・“自分の周りは福井には帰っていない”（トップ進学校生）

「大学出て就職する段階で、『どうしても福井に勤めたい』と言っていた人はあまりいなかったと思います、正直」（女性：県外大学→県内就職）

cf. “地元には大卒の仕事が少ない”という語り

・“自分の周りは福井に帰っている”（専門高校生等）

「私の同級生の仲のいい子で、県外に行って県外にずっといる子はたぶんいないです。みんな戻ってきていますね。たぶん就職の段階で帰ってきている子ばかりかな、と思います」（女性：県外大学→県内就職）

→大都市は大学卒業後も残って生きていく場所なのか　…教育階層差によって生じうる意味づけの違い　cf.「地元が好き」という語り

4. 人々の移動をふまえた都市研究に向けて

- 18歳の移動　世代別の変化　まとめ

・エリートの進学移動／社会移動の機会を伴った就職移動

↓

・進学移動の拡大／高卒就職による移動の縮小

↓

・誰でも移動する時代へ
　移動／非移動に加え、進学移動後戻る／戻らないの背後の階層性へ

本人視点では、準拠集団に合わせた行動（又はそれに抗う行動）
だが世代ごとに、進路の趨勢にも主観的な見え方にも階層差や男女差

⇒ローカル・ライフコースの複数性が生み出す、「大都市への移動」そして「都市」「地域」をめぐる社会意識・言説の重層性を掘り下げるのは社会学の仕事になるはず

人々の移動を踏まえた都市研究に向けて

- 本報告のまとめ　いま移動を取り上げる意味

①社会構造への切り込み

大震災やコロナを経ても大都市へ若者を送り続ける構造は強固

→そこに切り込まずして東京一極集中／地方人口流出の理解は深まらない

②意味づけの様相から社会意識への切り込み

18歳での選別を伴う進学移動（西野報告）、移動先の大都市での住宅市場・家族形成における階層分化の懸念（中澤報告）

→この状況から生まれる「大都市」「東京」「格差」へのまなざしは？

　加えて移動者を送り出す側・受け入れる側の意味づけは何を生む？

③モビリティの高い時代の社会理解

国際移動と国内移動が重なり合って形成される都市社会

→分離していた両研究をつないでいく必要性（申報告）

参考文献

・鰺坂学, 2005,『都市同郷団体の研究』法律文化社.

・荒井良雄・川口太郎・井上孝編, 2002,『日本の人口移動——ライフコースと地域性』古今書院.

・遠藤健, 2022,『大学進学にともなう地域移動』東信堂.

・江崎雄治, 2007,「山形県庄内地域出身者のUターン移動」石川義孝編著『人口減少と地域——地理学的アプローチ』京都大学学術出版会, 171-190.

・江崎雄治・荒井良雄・川口太郎, 1999,「人口還流現象の実態とその要因——長野県出身男性を例に」『地理学評論』72A(10): 645-667.

・江崎雄治・荒井良雄・川口太郎, 2000,「地方県出身者の還流移動——長野県および宮崎県の事例」『人文地理』52(2): 80-93.

・林拓也, 2002,「地域間移動と地位達成」原純輔編著『流動化と社会格差』ミネルヴァ書房, 118-144.

・石黒格・杉浦裕晃・山口恵子・李永俊, 2012,『「東京」に出る若者たち——仕事・社会関係・地域間格差』ミネルヴァ書房.

・石川義孝編著, 2001,『人口移動転換の研究』京都大学学術出版会.

・石倉義博・西野淑美・元森絵里子・西村幸満・平井太郎, 2012,「Uターンとは何だろう」東大社研・玄田有史編『希望学　あしたの向こうに　希望の福井、福井の希望』東京大学出版会, 246-276.

参考文献

・磯村英一・鵜飼信成・川野重任編, 1971,『都市形成の論理と住民』東京大学出版会.

・吉川徹, 2001,『学歴社会のローカル・トラック――地方からの大学進学』世界思想社.

・松本通晴・丸木恵祐編, 1994,『都市移住の社会学』世界思想社.

・見田宗介, 1965,「新しい望郷の歌――1960年代の社会心理状況」『日本』8(11): 214-219.

・中村牧子, 1999,『人の移動と近代化』有信堂高文社.

・中澤高志・神谷浩夫, 2005,「女性のライフコースにみられる地域差とその要因――金沢市と横浜市の進学高校卒業生の事例」『地理学評論』78(9): 560-585.

・西野淑美, 2006,「女性の地域移動歴と教育・住宅所有の機会」『社会福祉』47: 115-127.

・西野淑美, 2019,「地域移動と社会移動をめぐる「了解」の変化――50年間の福井市内高校卒業生への調査より」『日本都市社会学会年報』37: 62-79.

・西野淑美・石倉義博, 2020,「住宅再建までの判断と道程――同じ町の人々の異なる8年間」東大社研・中村尚史・玄田有史編『地域の危機・釜石の対応』東京大学出版会, 253-283.

・奥田道大・田嶋淳子, 1991,『池袋のアジア系外国人――社会学的実態報告』めこん.

・佐藤（粒来）香, 2004,『社会移動の歴史社会学』東洋館出版社.

・高橋勇悦, 1974,『都市化の社会心理 日本人の故郷喪失』川島書店.

参考文献

・東京大学社会科学研究所・玄田有史・中村尚史編, 2009,『希望学3 希望をつなぐ――釜石からみる地域社会の未来』東京大学出版会.

・粒来香・林拓也, 2000,「地域移動から見た就学・就職行動」近藤博之編『日本の階層システム3 戦後日本の教育社会』東京大学出版会, .

・Urry, J., 2007, *Mobilities*, polity. (=2015, 吉原直樹・伊藤嘉高訳『モビリティーズ：移動の社会学』作品社.）

・渡辺栄・羽田新, 1987,『出稼ぎの総合的研究』東京大学出版会.